

池上 禎造 名 誉 教 授 略 歴 ・ 著 作 目 録

以下は、蜂矢真郷編「池上禎造先生略歴ならびに著作目録」（「日本語の研究」2-4〔「国語学」通巻227〕[2006・10]）を基にし、京都大学名誉教授安田章氏の御教示を基にした同「池上禎造先生略歴ならびに著作目録」の訂正（「同」3-2〔「同」通巻229〕[2007・4]）による修正を加え、さらに、同志社大学名誉教授玉村文郎氏の御教示、および、大阪大学大学院准教授岡島昭浩氏の協力を中心とするその後の調査（蜂矢が見つけたものもあるが、岡島氏の力によるものが多い）によって、蜂矢が修正したものである。主な修正箇所を下線を施した。今後とも、補うべきことがあれば、修正して行くことにしたいと考えている。

神戸松蔭女子学院大学教授片岡利博氏の御了承の上、ここに掲載するものである。

(2010年3月)

本稿は、「池上禎造教授執筆略目録」（「語文」〔大阪大学〕32 [1974・9]）、「池上禎造教授 略歴・著作目録・講義題目」（「南山国文論集」5 [1981・3]）を基にして、その他の調査を加え、また、著作についてはそれらを再確認し、追加・修正を施して作成したものである。洩れあらば、御寛恕のほどをお願い致したい。

略歴については、学会編集委員長（当時）近藤泰弘氏、学会事務室、他に協力いただいたところがあり、著作の再確認については、大阪市立大学大学院教授毛利正守氏、京都大学大学院教授木田章義氏、大阪大学大学院助教授岡島昭浩氏、京都府立大学助教授青木博史氏、中央図書出版社上岡佑二氏、臨川書店他に協力いただいたところがある。特に、岡島氏の協力により、「その他」を中心とするかなりの著作を追加することができた。記して感謝の微意を表す。

なお、論文の題について、論文冒頭部と目次とで異なる場合は論文冒頭部のものを正とし、副題末部のダーシ（縦棒）が初出と著書に収載されたものとで異なる場合は初出によった。発行月について、奥付とその他とが異なる場合は奥付を正とし、印刷月と発行月とが異なる場合は発行月によった。

（この部分は、修正を加えていない。）

略 歴

1911（明治44）年1月10日 京都市上京区（現、中京区）にて出生

1927（昭和2）年4月 第三高等学校文科甲類入学

1930（昭和5）年3月 同卒業

同年4月 京都帝国大学文学部文学科入学

1933（昭和8）年3月 同卒業（国語学国文学専攻）

同 京都帝国大学文学部副手〔1938（昭和13）年3月まで〕

同年4月 京都帝国大学大学院入学

1938（昭和13）年3月 同退学

同 第三高等学校講師〔1940（昭和15）年度より 1949（昭和24）年8月まで、1944（昭和19）年度の半年を除き、京都帝国大学文学部講師〕

1942（昭和17）年3月 第三高等学校教授
1947（昭和22）年11月 国語学会評議員〔1982（昭和57）年3月まで〕
1949（昭和24）年8月 京都大学分校教授〔文学部授業担当、1953（昭和28）年度より大学院文学研究科授業担当〕
1958（昭和33）年5月 国語学会理事〔1962（昭和37）年5月まで〕
1963（昭和38）年4月 京都大学教養部教授〔文学部・大学院文学研究科授業担当〕
1964（昭和39）年1月 国語審議会委員〔1966（昭和41）年1月まで〕
1965（昭和40）年7月 大阪大学文学部教授〔大学院文学研究科担当〕
1966（昭和41）年6月 国語審議会委員〔1968（昭和43）年5月まで〕
1968（昭和43）年6月 国語審議会委員〔1970（昭和45）年6月まで〕
1970（昭和45）年5月 国語学会理事〔1972（昭和47）年5月まで〕
1970（昭和45）年7月 国語審議会委員〔1972（昭和47）年6月まで〕
1974（昭和49）年4月 大阪大学停年退官、大阪大学名誉教授
同 南山大学教授
1974（昭和49）年6月 京都大学名誉教授
1981（昭和56）年3月 南山大学退職
1982（昭和57）年5月 国語学会名誉会員
1983（昭和58）年11月 勲三等旭日中綬章受章
2005（平成17）年12月14日 京都市左京区の自宅にて老衰により死去、満94歳

（この部分は、修正を加えていない。）

著作目録

著書（編著・共著・共編著・共編・共監修を含む）

- 『萬葉集講座』6 編纂研究篇（共著）〔1933・7 春陽堂〕「卷十七・十八・十九・二十論」
『新撰字鏡』（共編）〔1944・12 全国書房（古典索引叢刊3）、1967・12増訂版 臨川書店、1973・12増訂版増刷 臨川書店〕（校注）
『干禄字書』（編著）〔1946・9 京都大学国語学国文学研究室〕「（干禄字書）解説」
国語学会編『国語の歴史』（共著）〔1948・10 秋田屋〕「第四篇 近世」
『日本文学言語史料』（共編）〔1949・10 出来島書店、のち（1950・10からか）東門書房〕
『日本文学言語史料 別記』（共編）〔1950・10 東門書房〕
国語学会編『国語の歴史』改訂版（共著）〔1951・6 刀江書院〕「第四篇 近世」（補訂）
『萬葉集大成』6 言語篇（共著）〔1955・5 平凡社、1986・6新装版 平凡社〕「萬葉人の言語生活」
『高等国文 教授資料』1～3（共監修）〔1956・6 中央図書出版社〕
『高等国文』1～3（共編）〔1957・1 中央図書出版社〕
『文体の変遷』〔1959・1 岩波書店、『岩波日本文学史』16 のうち〕
『校本干禄字書』（編著）〔1961・5 広島大学文学部国語学研究室〕「（干禄字書）解説」（再執筆）
『複製悉曇要訣』（編著）〔1963・11 京都大学国文学会〕「悉曇要訣開題」
『日本語の歴史』2 文字とのめぐりあい（「執筆・資料提供」者の一人）〔1963・12 平凡社〕
『日本語の歴史』3 言語芸術の花ひらく（同）〔1964・4 平凡社〕
『日本語の歴史』6 新しい国語への歩み（同）〔1965・5 平凡社〕

『時代別国語大辞典上代編』(共編著) [1967・12 三省堂]

『新村出全集』8 書誌典籍篇I (共編) [1972・1 筑摩書房] 「解説I」

『中世国語資料』(編著) [1976・12 思文閣出版、陽明叢書〔国書編〕14] 「解説」(遊仙窟・万葉詞・
仮名文字遣・下学集・名目抄(甲本・乙本)・僂幼略記)

『漢語研究の構想』[1984・7 岩波書店]

著書『漢語研究の構想』に対して、阪倉篤義氏(「文学」53-3 [1985・3])、山田俊雄氏(「国語と
国文学」62-6 [1985・6])、佐藤喜代治氏(「国語学」141 [1985・6])の書評がある。

論文 (☆印の論文は、著書『漢語研究の構想』に収載)

「古事記に於ける仮名「毛・母」に就いて」(「国語・国文」2-10 [1932・10])

「「添フ」の仮名遣について」(「文学」1-9 [1933・12] 「発見と報告」欄)

「助数詞攷」(「国語・国文」10-3 [1940・3])

「大阪の方言」(「大大阪」17-1 [1941・1 大阪都市協会] 国文学と大阪特輯号)

「遊仙窟の一古鈔本について」(「国語・国文」11-2 [1941・2])

「国語音韻の特質といはるるものにつきて」(「日本諸学振興委員会研究報告」12 [1941・11] 国語国
文学)

「梅が花」と「梅の花」(澤瀉久孝編『萬葉雜記』[1942・10 晃文社])

「文字論の位置」(「国語・国文」15-3・4 [1946・3-4] 国語国字問題特輯)

「中古文と接続詞」(「国語・国文」15-12 [1947・2]) (『論集日本語研究』12 中古語 [1980・6 有精堂
出版] 所収)

「文法はなぜおもしろくないか」(「国文研究」1 [1948・6 国文研究会／新日本図書] 「国語学」欄)

「真名本の背後」(「国語・国文」17-4 [1948・7]) ☆

「語中のハ行音」(「国語・国文」18-1 [1949・4]) (『論集日本語研究』13 中世語 [1980・12 有精堂出
版] 所収)

「現代日本語の問題」(「国語学」7 [1951・9] 特輯 現代語の諸問題)

「もしほぐさ—文字史への一頁—」(「国語国文」20-7 [1951・9]) ☆

「明治初期の文章」(「言語生活」6 [1952・3])

「萬葉集はなぜ訓めるか」(「萬葉」4 [1952・7])

「文字・仮名遣の史的研究を跡づけて」(「国語学」10 [1952・9] 特輯 国語史研究の回顧)

「「はい」と「いいえ」」(「国語国文」21-8 [1952・9])

「名乗字」(「国語国文」21-9 [1952・10] 吉澤博士喜寿記念特輯) ☆

「日本文法論小史」(「国文学解釈と鑑賞」17-12 [1952・12] 特集 日本文法の整理)

「キリシタン資料」(「国語学」11 [1953・1] 「国語学入門講座」欄)

「近代日本語と漢語語彙」(『金田一博士古稀記念 言語民俗論叢』[1953・6 三省堂]) ☆

「自筆本と誤字」(「国語国文」22-11 [1953・11]) ☆

「言語生活研究の一意義」(「国語国文」23-4 [1954・4])

「漢語の品詞性」(「国語国文」23-11 [1954・11]) ☆

「明治前期国語資料の処理」(「国語国文」24-4 [1955・4])

「明治以来の正書法」(「言語生活」46 [1955・7] 特集 片かなと平がな)

「日本人の言語観」(『講座日本語』4 日本人の言語生活 [1955・11 大月書店])

- 「妙続大師語録の抄—江戸時代初期東国文献—」（「国語国文」24-11 [1955・11] 吉澤博士追悼号）
- 「文字論のために」（「国語学」23 [1955・12]）
- 「日本語の発達」（『ことばの講座』1 世界のことば・日本のことば [1956・5 東京創元社]）
- 「上代特殊仮名遣の万葉集への適用と解釈」（「国文学解釈と鑑賞」21-10 [1956・10] 万葉人の生活・社会・言語）
- 「言葉の文化史」（「NHK 国語講座」3-1 [1957・1 ラジオ サービス センター]、のち『NHK 国語講座』2-2 私たちの言語生活 [1957・8 宝文館]）
- 「漢語流行の一時期—明治前期資料の処理について—」（「国語国文」26-6 [1957・6]）☆
- 「言語生活の構造」（『講座現代国語学』1 ことばの働き [1957・11 筑摩書房]）
- 「言語学」（「国文学解釈と鑑賞」23-5 [1958・5] 特集 続論文への道「隣接諸学との問題」欄）
- 「国語表記法の諸問題」（『続日本文法講座』2 表記編 [1958・6 明治書院]）
- 「文字—その本質と機能」（『国語教育国語講座』3 表記法の理論と教育 [1958・7 朝倉書店]）
- 「近代語」（『日本文化史講座』5 [1959・1 明治書院]）
- 「解釈とかなづかい」（『講座解釈と文法』1 総論 [1960・1 明治書院]）
- 「正訓字の整理について」（「萬葉」34 [1960・1] 澤瀉博士古稀記念号）
- 「「方」字の合音用法」（『島田教授古稀記念 国文学論集』 [1960・3 関西大学国文学会]）☆
- 「翻訳文の文法」（『講座解釈と文法』7 現代文 [1960・4 明治書院]）
- 「言語生活史としての国語史」（「国語と国文学」37-10 [1960・10] 特輯 国語史はいかに記述すべきか）
- 「漢語の造語力の現状」（「言語生活」129 [1962・6] 特集 漢文はどうなる）☆
- 「言語生活の変遷」（『講座現代語』2 現代語の成立 [1964・3 明治書院]）
- 「日本語教育と国語学」（「一九六七年夏期日本語セミナー要録／—日本語研究レポート第一集—」 [1967・11 日本と日本語を考える会／関西研修センター]）（『関西研修センターに於ける日本語教育の現状及び一九六七年夏期日本語教育研修セミナーの報告』 [1968・3以前か 海外技術者研修協会] 第二部「一九六七年夏期日本語教育研修セミナー —日本語教育研究レポート 第一集—」所収）
- 「表記法と国語政策」（『講座正しい日本語』3 表記編 [1971・5 明治書院]「教育と政策」欄）
- 「語彙と文字」（『国語シリーズ』別冊1 日本語と日本語教育—語彙編— [1972・8 文化庁]）
- 「椿字の和用法」（「語文」〔大阪大学〕30 [1972・12]）☆
- 「現代敬語の概観」（『敬語講座』6 現代の敬語 [1973・10 明治書院]）
- 「日本における漢字」（「アジア文化」11-2 [1974・9 東洋哲学研究所]）☆
- 「漢字と日本の固有名詞」（「懐徳」46 [1976・10 懐徳堂堂友会]）☆
- 「識字層の問題」（『岩波日本語』別巻 日本語研究の周辺 [1978・3 岩波書店]）☆
- 「漢語研究の課題」（「南山国文論集」3 [1978・3]）☆
- 「表記の歴史から見た現代語表記法」（『講座日本語学』6 現代表記との史的対照 [1982・5 明治書院]）
- 「図中標示の名所名から」（「文学」52-3 [1984・3] 洛中洛外屏風の世界）

その他

- 新刊紹介「国語史の方言的研究 二輯 奥里将建著」（「国語・国文」6-9 [1936・9]）
- 新刊紹介「国語史 上古篇」（「国語・国文」7-2 [1937・2]）

- 新刊「国語学新講 東条操著」（「国語・国文」7-8 [1937・8]）
- 新刊「橋本進吉述・古代国語の音韻に就いて」（「国語・国文」12-10 [1942・10]）
- 「亀幼略記解説」（「国語・国文」18-2 [1949・5]、「国語・国文」18-1.2 [1949・4-5] に亀幼略記の翻刻あり）
- 書評「国立国語研究所刊行書」（「文学」20-12 [1952-12]）
- 書評「大野晋著「上代仮名遣の研究」」（「国語学」15 [1953・12]）
- 「話されない言葉」（「女子大國文」1 [1955・3]「現代の話し言葉」昭和二十九年度京都女子大学夏季公開講座 講演要旨）
- 「狩谷椽斎」「口語」「国語学史」「書写」「助数詞」「数詞」「日本語」「日本語の系統」「表記法」「文語」「文字論」（項目執筆）（国語学会編『国語学辞典』[1955・8 東京堂出版]）
- 書評「石垣謙二著『助詞の歴史的研究』」（「文学」24-7 [1956・7]）
- 書評「松村明著『江戸語東京語の研究』」（「日本読書新聞」[1957・6・24]）
- 展望「国語史（中世以降）」（「国語学」36 [1959・3] 昭和三十二年度における国語学界の展望）
- 展望「国語史（中世以降）」（「国語学」38 [1959・9] 昭和三十三年における国語学界の展望）
- 書評「杉本つとむ著「近代日本語の成立」」（「解釈」6-9 [1960・9]）
- 展望「文字・表記」（「国語学」49 [1962・6] 昭和35・36年における国語学界の展望）
- シンポジウム「これからの国語学」（「国語学」54 [1963・9] 池上禎造・鈴木孝夫・柴田武、司会 森岡健二）
- 「誤字説の説」（澤瀉久孝『萬葉集注釋』17附録（月報）[1967・1 中央公論社]
- 「漢字とカナ一文字」白川静・池上禎造・貝塚茂樹、司会 梅原猛（上山春平・梅原猛『シンポジウム日本と東洋文化』新潮社 1969・7・10）
- 「新村先生をいたむ」（「読売新聞」1967・8・19）（新村猛編『美意延年 新村出追悼文集』[1981・7・20 新村出遺著刊行会] 所収）
- 「新村出博士と国語学」（「国語学」71 [1967・12]）（新村猛編『美意延年 新村出追悼文集』[前掲] 所収）
- わたしの読んだ本「岩淵悦太郎監修／ことばの生活 全四巻」（「言語生活」199 [1968・4]）
- 言語時評「昭和四十四年四月」（「言語生活」211 [1969・4]）
- 言語時評「学部の名」（「言語生活」212 [1969・5]）
- 言語時評「ヤマボコと大文字焼き」（「言語生活」213 [1969・6]）
- 「あるめぐり逢い」（「穎原退蔵著作集月報」14 [1980・5 中央公論社]）
- 「狩谷椽斎」「国語学史」「日本語」「日本語系統論・成立論」「表記法」（項目執筆）（国語学会編『国語学大辞典』[1980・9 東京堂出版]）但し、「日本語」は池上禎造・金田一春彦、「日本語系統論・成立論」は馬淵和夫・安田尚道・池上禎造
- 「「国語・国文」と「国語国文」」（京都大学国文学会 会報」31 [1983・10]）
- 「忌詞」「隠語」「聞書」「国語」「言霊」「祝言」「亀幼略記」「文体」「文法」（項目執筆）（『日本古典文学大辞典』[1983・10-1985・2 岩波書店]）
- 書評「尾崎雄二郎・島津忠夫・佐竹昭広著『和語と漢語のあいだ 宗祇暈字百韻会読』」（「国文学 解釈と教材の研究」30-13 [1985・11]）
- 「漢字と固有名詞」（「神陵文庫」6 [1988・10 三高自昭会]）
- 「漢字と固有名詞（続）」（「神陵文庫」7 [1989・6 三高自昭会]）

(以下、新規)

なお、追悼記事等に次のものがある。

- ・「阪大 NOW」88 [2006・2]
「訃報」欄「池上 禎造名誉教授（文学部）逝去」
- ・「京大広報」609 [2006・2]
〈訃報〉欄「池上 禎造 名誉教授」
- ・「語文」〔大阪大学〕86 [2006・6]「池上禎造先生追悼」
宮地 裕「追悼 池上禎造先生」
小山登久「池上先生と私」
蜂矢真郷「池上禎造先生を悼む」
- ・「京都大学国文学会 会報」54 [2006・9]
木田章義「研究室から」
吉田金彦「池上禎造先生を偲んで」
若井勲夫「池上先生の講義風景と学風」
- ・「日本語の研究」2-4 [「国語学」通巻227] [2006・10]「池上禎造教授 追悼」
渡辺 実「告別」
宮地 裕「惜別 池上禎造先生」
小林賢章「池上禎造先生の思い出」

以上

追 加

その後、大阪大学助教新井（杲）由美氏の御協力により「大阪大学国語国文学会会報」の古いものが確認でき、また、中部大学教授愛知峰子氏および南山大学人文学部日本文化学科、南山エクステンション・カレッジの方々の御協力により南山大学関係のものがいくつか確認できて、「著作」の「その他」のものが追加できることになったので、次に挙げることにする。

なお、この際に、「論文」欄の誤植を一つ修正した。

(2017年12月 蜂矢真郷)

下線部のものを、見つけていたのに忘れていたことに気づいた。申し訳ないが、再度の追加である。

(2018年2月 蜂矢真郷)

「会心の講義—小島先生に」（「大阪大学国語国文学会会報」4 [1965・2]、小島吉雄先生退官記念）

「誤用の徳」（「京大教養部報」6 [1965・6]）

「国語学とは」（「南山 [NANZAN UNIVERSITY BULLETIN]」32 [1976・1]）

「会報創刊によせて」（南山大学国語学国文学会会報「かはなやま」1 [1976・3]）

「後記」（「南山国文論集」1 [1976・10]）

（無題）（「大阪大学国語国文学会会報」9 [1977・12]、「近況報告」欄）

「あとがき」（「南山国文論集」4 [1980・3]）

（無題）（南山大学国語学国文学会会報「かはなやま」7 [1980・11]）

以上